

# 第1章 戦場

広島での終戦

## 通信兵として私が見た八月六日の広島

小野崎浅治さんのお話から

それは、昭和二十年（一九四五年）八月六日のことです。私たちは通信兵として当時和歌山の名手という学校の体育館に寝泊りしていました。そこに八月六日の夜中に移動命令が出ました。そして暗い中で服を着て荷物を背負って夜中のうちに出発しました。どこへ行くかは分かりません。ただ、途中で「広島に行くのだ。」「広島は今たいへんなことになっているのだ。」という声がなく聞こえてきました。夜中に出発して広島駅に着いたのも夜中です。降りたけれどどこが駅だか分からない。暗くて電気もありません。ランプが何個かあるだけです。駅員は顔から腕から包帯をして何も言いません。

上官の命令に従って広島駅の外に出ましたけれども、真っ暗で何も見えません。ただ、遠くの方に焚き火の跡のようにポツポツと火が上がっているのが見えました。夜なので煙は見えませんが火が上がっていました。とにかく行き先も分からないし、どうしようもないからということ、真っ暗な中で軍服を着たまま野営しました。

夜が明けて見たものは何であつたでしょう。当時は確か広島市は三十五万人位の人口で結構立派な町ではなかつたでしょうか。でもほとんど家は見えません。見えるのはコンクリートの破片と鉄くずだけです。それではるか遠くの方にポツポツと火が燃えているのが見えるような状態でした。自分の前には死骸と鉄かぶと、鉄板、コンクリートの破片が散乱している、そういう状態でした。

まず本隊が出発しましたが、なかなか帰ってこない。私たちは前の晩も朝もご飯を食べてお

○野営 夜、軍隊が陣営を設けること。

○通信局 郵便や電話などを取りついでいた施設。昭和二十四年（一九四九年）に郵便局と電話局に分かれた。

りませんのでおなかが空いてどうしようもありませんでした。それで持っていた大豆をそこらへんの鉄板、鉄かぶとで炒ったものを食べて我慢していました。十三時ごろにようやく上官と馬が迎えに来ました。そして一応食事をして出発しました。大きい道路はどうか通れるような状態でしたが、小さな道路は残骸で人間が通ることも馬を通すこともできません。大きい道路の脇には人間の死んだ跡だとか鉄板とか、瓦とか、そういうものしかありません。その道路を歩いているときに最初に見た川、その川原には水を求めて亡くなった方が何十、何百とありました。その方々を見たときに何とも言えない気持ちになりました。私達は軍人です。軍人であれば死ぬのは当然という気持ちでしたけれども、ここで死んだ方々は全部民間の方々です。軍人ではありませんでした。

とにかく命令どおりに宿舎に行きました。宿舎といいますが窓もシャッターもありません。ただコンクリートの建物があるだけです。私どもは通信隊ですから、通信局へ行きましたけれども、待っているのはやはりコンクリートの残骸・建物と先発



イメージ図

話しかけても動かない駅員

○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。

した同僚だけです。民間人は一人もおりません。逆に遺体も死んだ方の姿もありませんでした。あるのは骨だけです。それを片付けて、私達はその建物の中に板を敷いて泊まりました。そういう状態の中で十日間おりました。

仕事は、上官のお供をして軍司令部に一日一回行くだけです。後は兵舎に帰ってその辺を見て歩くだけです。そのときに見たのは、とにかく家という家は全部燃えてしまっていないことです。金庫だけがそのままの姿で残っています。本当に何と言っているのか、人間はいない、家はない、金庫だけが何百と残っている。後で話を聞いたかぎりでは、金庫を壊して中を見たところ、風と空気をあてたら全部飛んでしまって、お金も書類も何にもない、そういう状態であったということです。

そばに小学校がありました。その小学



イメージ図

広島原爆投下でも残っていた金庫

○奉安殿 天皇と皇后の

写真(御真影)と教育勅語を納めるために学校の敷地内に作られた建物。

○教育勅語 明治天皇が直接国民に発した国民道徳の根源、国民教育の基本理念。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

校もほとんどコンクリートだけでしたけれども、その学校には、死骸や人の死んだ姿がないのです。校庭に行きましたら、奉安殿という天皇陛下の写真と教育勅語を安置している建物があって、その傍に学生(児童)の遺骨がありました。ちょうど朝、朝礼の時間に瞬間的に原爆でやられて逃げる余裕がなかったのです。市内には防空壕もたくさんあり、見てみましたが防空壕にも死骸がない、骨もありません。本当に瞬間的に十四万人という方が亡くなってしまったのです。ただ、それは公表された数字が十四万人ということ、私に言わせると、爆弾が落ちて死んだ、そして一時間たって死んだ、二時間たって：もう、そうやって何日間も人が亡くなっている。でも一応、あの原子爆弾で亡くなった方は十四万人となっています。戦争の犠牲者、戦争をやめるための、中止させるための犠牲者です。

それが十四万人です。けれどもその後でも数知れない方が亡くなりました。軍人が亡くなるのならまだしも民間のみなさんや若い方々、小学生、そういう十四万人という多くの方々が犠牲になっています。私は、決して二度と戦争はしたくないと思っています。

どうか、みなさんもこれから一生懸命勉強して親孝行を忘れないでいただきたい。私たちくらいの歳になってから、あのとき親孝行をすれば良かったなと思っても後悔に過ぎません。そして、みなさんの生き方はそれぞれ別々だと思えますけれども、どうか社会のために少しでも、私は人間として生まれてきて良かったなと思えるような、思われるような人生を送っていただきたいと思う次第です。

DATA

平成21年度東区平和事業

聴き取り

- ・平成21年12月2日
- ・伏古小学校



小野崎浅治(おのざき・あさじ)さん

- ・大正13年(1924年)生まれ
- ・札幌市東区在住